

歴史の始源と口誦伝承

原始社会や古代社会に関する研究は、戦後大いに前進した。とりわけ考古学者と文献史学者との提携の中に、みるべき多くの成果があり、共同研究の態勢が次第にできあがりつつあることは、戦前に比べて大きな進歩だといつてよい。だが一度口誦伝承上よりの原始・古代への究明ということになると、戦前の業績を抜んでる研究は、きわめて数少く、そうした方面の研究は、歴史家よりも文学研究者や神話学・民俗学畑の人々にまかされてきたというのが、偽らぬ現状であろう。歴史家の中には、「口誦伝承」の問題などは、歴史学者の本気で取りくむ問題でないと公言する人があるくらいである。

こうした学界のあり方に、「口誦伝承」の研究が、歴史学にとつていかに重要な課題であるかはつきりと示す好著が公刊された。それが本書である。この書物の内容は、著者が一九五二年三月以来学術雑誌に公表された七篇と新たに書き加えられた三篇とから構成

されており、習俗環境篇（第一部―四章）、素材様式篇（第二部―六章）に配分されている。口誦伝承の不易性を伝承荷担者と伝承体の内部から明かにせんとする著者の努力は、「伝承学」ともよぶべき立場を通して、かなりの成果をあげている。

第一部第一章では、まずポリネシアにおける口誦伝承の習俗と社会組織が取上げられる。著者が第一章でポリネシアを対象としたのは理由がある。ポリネシア人は、未開諸民族の中でも、近代までもつとも長くかつ厳格に口誦伝承の世界を維持した人々であり、その豊かさには目をみはるものがあるからだ。この章での著者の視点は、マオリ人の間における司祭の系譜伝承が、頗る厳格であるとするプラウン以下の諸報告の綿密な検討に始まる。そして他のポリネシア諸島においても伝承保持の習俗が類似または異つた形で見出されることを指摘する。系譜伝承が、継続する社会の自然の勢に委ねられているのではなく、口授による一つの宗教的な意味を持った学校の組織——Whare-wanangaという建物で行われる——を背景としたこと。更に速い祖先にまで遡る直系系譜を保持するポリ

ネシア型、三・四代乃至四・五代に遡るのみメラネシア型との相違が何によるものなのかを明かにした箇所などに注目すべき見解が述べられている。ポリネシア型が土地所有権の継承を目的とする為のみであれば、天地開闢以来の長々しい神聖伝承を必要としない点に触れ、長い系譜を保持して尊貴の身分を誇示する精神形態が「祖先崇拜の信仰の強く動いている厳しい階級制度の存する貴族社会に於て最もよく育成せられたものであること」（二七頁）を論証する。著者は第七章及び第八章で、わが国の記紀神話群がポリネシア型であることを力説されているが、後述の關係からいつてもこの叙述は重要である。

第二章では、文字を持ちながら、その性情の故に、伝承による神話・伝説に強い関心を持つ古代ケルト社会の口誦伝承の習俗と咒僧々団を取り扱う。主たる伝承荷担者である咒僧 *Druids* と吟誦詩人 *Bards* との中間的存在らしい *Vatis* の性格を論じた箇所（五三―五六頁）には、古代社会における口誦伝承が、宗教的なものによつて支持せられている事情を改めて教えられる。文字を有する人々が如何にして口誦伝承を保持したかという問

題は、記紀・風土記などのようにすでに記録化した材料より口誦伝承の世界を明かにしようとした筆者などには、もつとも興味深い問題である。

第三章ではポリネシア・古代ケルト両社会の中間形態ともいふべき結繩・貝鏡などによる古代ベルー・北米インディアンの場合が考察の対象となる。結繩が笑は数を基調とした記憶補助の方法であり、また「年表の用途をなす」結繩のあり方が報告される（本朝世紀との対照なども面白い一九六頁）。北米インディアンを用いる *wampun-belt* が、やはり記憶の手掛りとなるものであったことを推定される。不安全表象と記憶伝承との関連は、わが國の考古学上の遺物（石・串など）についての示唆的発言と共に、今後更に検討する必要がある。

第四章は、前述の三章の総括とも考えられる論稿である。特に王と司祭とが同族でない場合、あるいは王が司祭的性格を持たぬ場合でも、その間に「同盟的理解」が成立していることを論究されるあたりには、新知見が披瀝されている。わが國の古伝において中臣氏（中臣氏）の遠祖「天鬼屋命」が、一定の敬称を有し、

「首導の立場」にあることも、中臣氏が皇室と特殊の關係にたつ司祭氏族であつたことによるものとする論点には、注意を促すものがある。

第二部では原始文学のスタイルと特質が、系譜伝承や伝承体・頌辭・哭辭・文学様式などから論究されている。第五章における神名・人名の不易性の問題——伝承体を通して——。第六章における系譜的関心の背景、咒術と祖先、死霊と祖霊の關係など。系譜伝承と祖霊信仰の原初形態を研究しようとするものには、多くの示唆をうける見解が述べられているが、特に日本古代史の研究者にとつて必読の箇所は、なんといつても、第七・八・九章の分析である。限られた紙数の中でその全体を伝えることはもとより不可能であるが、わが國の古典の系譜的部分が二つの類型（ポリネシア型—図表的系図、北歐型—系譜的説話）をもち、図表的系譜の投射が古事記中巻の綏靖天皇↓開化天皇の帝紀の基礎にあるとする見解（二四八頁—二四九頁）、わが國の神話群がポリネシア型であつて、英雄詩や史詩を生みだすギリシア型でないとする論述（二五二頁—二五四頁）等々は、かつての

「英雄時代」論争で示されなかつた広い民族学的視野にたつ指摘であるだけに、注目に値するものがある。日本・北歐・ギリシア・ロマ・中央アフリカよりエジプト・南印度・ハワイなどの諸地域・諸部族にわたる比較研究は、頌辭・哭辭の研究に具現している。最後の第十章の原始文学における伝承体の文学的様式についての研究は、原始文学のみならず、諸様式（並立・繰り返し・詳述・比喩など）を支える原始的思考形態の解明に役立つ所が多い。

以上本書の内容を簡単に紹介したが、日本の古文獻はもとよりのこと、民俗学・民族学・文化人類学についての多年の深い造詣に裏付けられて、「口誦伝承と歴史の原初形態」という著者の課題は、見事にのりを結んでいるといえるだろう。研究者の比較的に少ない現状においては、本書が学界に寄与したところは決して少くない。

だが問題のすべてが解明されたわけではない。資料的にもまた方法的にも、別の視角よりの研究討議がやはり必要である。たとえ口誦伝承の記録化の過程に関して、著者は口誦伝承の不易性を主張する立場より作為性

が問題のすべてが解明されたわけではない。資料的にもまた方法的にも、別の視角よりの研究討議がやはり必要である。たとえ口誦伝承の記録化の過程に関して、著者は口誦伝承の不易性を主張する立場より作為性

についてきわめて否定的であるが、「伝承はどれだけ変化せぬ儘、旧態を保持すること出来るか」(一四九頁—一五〇頁)という

問題は、本書の論述によつて果して完全に論じ尽されたであろうか。筆者もまた伝承体と伝承荷担者の性質よりいつて、口誦伝承の不易的要素を認める者の一人であるが、口誦伝承の内部にも発展があり(進化論的意味ではない)、特に文字化した場合などには、その社会的歴史的條件によつて変容の作用がはたらく場合の多い点も十分に考慮されねばならぬと思われる。そして一度記録化した伝承—文献伝承は、口誦伝承とは異質の要素を有することも注意する必要がある。モティーフの類似や形態の異同の分析は、非常に重要だが、文献伝承と口誦伝承の区別をしておくことは、常に肝要だと考へる。無論著者の論述はきわめて慎重である。わが国の古伝についても、「若干の部分は伝承体として存在してゐたとしても差支えない」というに止まるのみ(三七四頁)と控へ目に發言されている。それなら他の大部分はいつたいどうであるのか。口誦伝承がいかにして記紀に定着してゐたか。著者が津田史学とは反対の立場をと

つておられるだけに、今少しそのことを追究していただきたいかと思ふのである。

この点は次の疑問に連つてゐる。著者は神名列挙の部分について、図表的系譜のもつ意義に触れ、大國主神の挿話をはさんだ「右件自_二八嶋土奴美神_一以下、遠津山岬帶神以前、称_二十七世神_一」のくだりを通じて、帝紀に先行する伝承体に言及されているが(二四八頁)、著者のいわれるこの「十七世神」が直系神を意味するに拘らず、記録上の実数は実は「十五世神」であることなども、伝承体と記録化の間に介在する複雑な問題を物語つてゐる。口誦伝承と文献伝承の矛盾か、伝本上の誤写又は誤脱か、名の意義が重大であればあるだけ、口誦伝承と文献伝承の一応の配慮がなされねばならぬという所以である。更に「命」という一定の敬称を有する中臣氏の遠祖「天兒屋命」についての論証は、前述したように興味ある研究であるが、忌部氏と共に、どうして「天皇家の私的な伝承も次第に中臣・齊部二氏に移更して行く傾向が生じ」(一二四頁)るのか。著者が歴史学の出身であるだけにいつと掘り下げて欲しかったと思ふのは筆者ひとりであろうか。そのことを明

かにすることが、他氏の伝承、諸國語部との差異を明確にし、「命」(みこともち)の本質を究めることになると思へるからである。著者は「文献学から離れた立場」より出発したと最後の章に述べられているが、今後これらの問題に研究の歩を進めていただくことを願わずにはおられない。尚民俗学的なものにアクセントをおいた著者が、我が国の民俗に言及された場合、例が主として奈良県に限られたのは残念であつた。

以上日本古代史を専攻する者の立場より望蜀の言を提したが、それは決して本書の価値を損うものではない。本書によつて口誦伝承研究の道が容易となり、確固たる前提の築かれたことを心より喜びたい。(綠芸舎刊八〇〇円)

上田正昭

訂正 四〇卷三号に次の誤りがありましたので訂正いたします。

表紙目次 (誤) 江戸時代初期に於ける教訓仮名抄について → (正) 江戸時代初期に於ける教訓仮名抄について

五五頁 史学研究会七月例会予告 (誤)

水野清一 → (正) 水野清一